〔国語学入門講座〕

古辭書入門

築島裕

(一)前置き　(二)平安時代まで　(三)鎌倉室町時代

(一)前置き

従来日本で作られた辞書は、三種類に大別することが出来ます。第一は、漢字を読み書きする為に作つた辞書であつて、この中には漢字からその日本語としての読み方や意味を知る為のもの、或いは日本語をどのやうな漢字で書表はすかを知る為のもの、などがあります。第二は、古語歌語などを理解し、又それに基づいて歌文を作る目的で、語に解釈を附し、いろは順等の順序で配列したものであり、中古以後に作られたものであります。第三は、十六世紀末以後に渡来したヨーロッパ人たちが日本語を用ゐる目的で作つた、日本語→ポルトガル語、又はラテン語→日本語などの辞書であります。この三種類のうち、最後のものは、日本人の言語生活と直接の関係はないものでありましたが、今日となつて見ると過去の日本語を研究する上で、前二者に劣らない重要な価値を持つてゐるものですから、この稿では以上三者全部に亘つて概観することに致します。

(二)平安時代まで

平安時代までは、第一の、漢字を読み書きする為に作られた辞書だけであります。これはシナで作られた漢字の辞書を手本にして作つたものですが、シナの辞書は種類も数量も多く、(イ)字形によつて分類したもの（説文・玉篇）等、(ロ)意味によつて分類したもの（爾雅）等、(ハ)発音によつて分類したもの（切韻・広韻）等があります。これらは大抵漢字一字宛を項出し、その発音や意味を註記したものであります。それから又、集めた文字の範囲は、或る特定の書物に出て来る文字だけに限つたものではなく、広く一般に亘つて居ります。所が、これに対して、或る特定の書物に出て来る文字だけに限つて説いたものがあります。例へば「華厳経音義」「一切経音義」などがそれであつて、此の類を「音義」とも呼びます。これらは夫々「華厳経」「一切経」等に用ゐられてゐる字句だけを取出して解説を加へたものであつて、一字の漢字ばかりでなく、漢字二字以上の漢語をも多く含んでをり、この点で

今まで述べたものと違ひます。しかし、これも広い意味での「辞書」の中には含ませ得るものであり、しかも、特に古代日本の辞書の発達を考へる上には、どうしても見逃せない重要な意味を持つて居るものであります。

古代日本の学問は、今日の学問とは違ひ、殆ど総べてが、漢文を読み、又漢文を綴ることによつて行はれて居たのであります。それ故、学問と云へば、漢字を解読する為に、直ぐにこの字書音義の類が必要となるわけでありまして、今述べたやうな諸書も、日本に多く渡来し、又写されて、学問に用ゐられてゐたと考へられます。

所が、これらは元来、シナ語で読む為に作つたものでありますから、漢字漢語の註釈は、言ふまでもなく漢字で書いてあるだけであつて、日本語では書いてないのであります。それ故、これらの音義を見ただけでは、漢字漢語の意味は判るけれども、それに当る日本語が何であるかは分らないわけであります。所で、日本では、古くから漢文の「訓読」といふことが行はれ、漢字を読解する時、漢字一字ごとにその日本語の読みを定め、日本語の文法に従つて、漢文の順序を転倒したり、同じ漢字を二度読んだりして、漢文の字面に副つて読まれることが、時代を逐つて次第に盛になつて来た。そこで、訓読をしようとする時には、どうしても漢字漢語の日本語の読み方を知る必要が起つて来る。凡そかやうな原因から、漢字の日本語読みを示した書物が編まれ初めたことと思はれます。最初のうちは、以前にシナから伝はつてゐた辞書類を基にして、その体裁に倣つて漢文の註記を記し、その末に、例へば「笛、倭云布延」（笛、倭ニハフエト云フ）のやうに万葉仮名で日本語の読み方を書加へたのでありまして、後世のやうに漢字と片仮名で書いたのではありません。日本で出来た最初の音義が何であつたかは不明ですが、現存最古の遺品は「新訳華厳経音義私記」二巻で、奈良時代末に作られたらしく、延暦十三年（七九四）春に写した本であります。これはシナの学僧慧遠が著した「新訳華厳経音義」を基としその中に万葉仮名を使つて日本語の読み方（和訓）を書加へたものであります。この書物は、現在小川睦之輔氏の所蔵で、貴重図書影本刊行会から写真複製本が出て居り、岡田希雄氏の解説があります（倭訓だけに関しては「国語・国文」十一ノ三に岡田氏の論文あり）。

これと同類の書は奈良末期から平安初期にかけて多数に作られた模様で、複製本等で容易に見得るものだけでも、信行撰と云はれる「大般若経音義中巻」一巻（石山寺蔵、古典保存会複製）、空海撰「一字頂輪王儀軌音義」（弘法大師全集、大正新修大蔵経所収）「四分律音義」（聖語蔵、同朶複製）等があります。

又この時代には「訓註」と呼ばれるものがあります。これは本文の漢字漢語に施した註記・和訓で、或る時は本文中に割註で、又、或る時は章段の最後に記すものです。「音義」と多少違ひ、「音義」では本文が無く、又、本文の作者とは別な人が作つたものであるのに対し、「訓註」は本文と共に存し、又、本文と同一作者が書加へたもののやうであります。古く古事記日本書紀等にも見られますが、平安初期には「日本霊異記」があり、板本には群書類従本（日本古典全集複製）古写本には興福寺本（上巻のみ、同寺複製）、前田本（下巻

のみ、尊經閣叢刊複製）等があります。「成唯識論述記序釈」（善珠著）①（日本大藏經、大正新修大藏經所收）、「日本感靈錄」（續群書類從所收）②などもその一例であります。

以上申しました平安初期の音義訓註類は、殆どすべてが仏教経典の註釈書であつて、それを読解する必要から作られたものでありませうが、仏教書といへばそれより二百年も以前から伝はつて居た筈なのに、この頃になつて急にかやうな書を盛に作り始めたのは何故かと云へば、その理由は、色々考へられますが、その一つは、この頃までは漢文訓読を行つたのは、漢文に通じた帰化人が多かつたけれども、この頃から、漢文読解力の弱い本邦人で、この方面に手を出す人が多くなつたので、その為に、訓読すべき日本語を一々文字に書記す必要が起つて来たのではないかと思はれます。丁度この時代から漢文の本文に訓点を書記することが盛になりますのも、これと同じ原因に基づくやうに考へられます。

これらの書に見られる日本語は主に単語でありますが、平安初期の時代は、他に国語資料が極めて乏しい時代でありますから、国語史研究上非常に貴重な文献となつて居ります。

かやうに、日本での漢字註釈書は、先づ音義訓註類から作り始められたやうでありますが、やがてシナの字書に倣つて、狭い意味での辞書が出現します。その最初は「楊氏漢語抄」「東宮切韻」などであります。何れも原文は散佚してしまつて、今日では他書に引用したものから僅に知り得るだけなので、詳しくは分りません。この中「東宮切韻」は菅原是善（道真の父）の作、承和十四年から嘉祥三年の間（八四七―五〇）の成立と云はれ、恐らくシナの「切韻」に倣つて文字を韻によつて分けたもので、それに発音・意味を註し、更に万葉仮名で和訓を書加へたものであります。

今日完全に残つてゐる辞書の最古のものは空海の「篆隷万象名義」で、玉篇を抜萃し、篆書と隷書（今の楷書）とを記したものでありますが、これには和訓はありません（崇文叢書中に複製）。

これに続いて出たのが「新撰字鏡」であります。昌泰年間（八九八―九〇）に僧昌住が作つた十二巻の辞書で、シナの辞書「玉篇」を参照し、漢字二万余を集めてこれを字形によつて分類し、漢文で発音や意味を註し、併せて万葉仮名で、和訓を書加へてあります。この辞書には、前に述べた「日本霊異記」の訓註の和訓の一部が、そのまゝ取入れてあります。音義・訓註の類の和訓が、辞書編纂の為に利用されたことは、これを始めとして後にも多くの例があります。

新撰字鏡は天治元年（一一二四）の写本十二巻が図書寮に保存されて居り、大正五年にその複製本と和訓索引（山田孝雄博士編）とが刊行され、この大正刊本は更に昭和十九年に京都大学国語学国文学研究室で校異を加へて再刊されてゐます。新撰字鏡には、この他群書類従に収められた「享和本」がありますが、書写年代も新しく内容にも相違があります。

以上述べた音義・訓註・辞書の類は、何れも、漢籍仏典等の漢文を訓読する為に主として用ゐられたものと考へられ、言はば漢文解読用辞書でありますが、次に述べる「和名類聚抄」（略稱「和名

抄」は単に漢文解読のみならず、一般的知識を示す為に、諸の事物を分類して示した、言はば百科全書的な辞書であります。

「和名類聚抄」は新撰字鏡に次いで著はされた辞書で、著者は源順、承平年間（九三一―三八）に醍醐天皇の皇女勤子内親王に奉つたものであります。この辞書は分類体、即ち意味によつて語を分ち、天地部人倫部等十八部とし、日本紀私記、本草和名、文選など和漢の諸書を引用しつつ、その各項に漢文で註記し、併せて万葉仮名で和訓を記したものであります。語彙は、物の名（名詞）が大部分で、用言や副詞は殆ど見られません。先程この書が百科全書的なものだと云つたのは、この点からも察せられるのであります。若し専ら訓読の為にだけ役立たせようといふつもりで作つたのだつたら、このやうに体言ばかりでなく他に用言や副詞などが当然加へてあつてよい筈だと思はれます。

和名抄は最初は十巻として編纂されたやうですが、間もなく増補されて、平安末期には既に二十巻本も作られて居ります。十巻本は江戸時代の碩学狩谷棭斎が諸本を校定し考証を施した「箋註倭名類聚抄」（明治十六年刊、大正十年・昭和二年に複製、更に昭和十九年京大国語学国文学研究室で複製）が最も便利であります。古写本の中では十巻本の真福寺蔵本（鎌倉時代写）と二十巻本の保阪氏蔵本（平安末期写、高山寺本ともいふ）とが複製されて居り（但し何れも零本、前者は古典保存会、後者は古簡集影の中）、又元和三年（一六一七）に那波道円が刊行した古活字版（二十巻本）が日本古典全集から刊行されて居ます。又、京大複製本には精密な仮名索引が、又日本古典全集には仮名及び漢字索引が附いて居て、和訓や漢字を検索するのに便利であります。

和名類聚抄は平安時代から相当広く世に行はれてゐたらしく、類聚名義抄、色葉字類抄、節用集など、それ以後の辞書類にも大きな影響を与へてゐます。

和名抄に関聯して述ぶべきは、本草書（薬学関係書）に存する和訓であります。古くは「本草和名」（深根輔仁、延喜年間（九〇一―二三）撰）から「医心方」（丹波康頼、永観二年（九八四）撰）などには、漢文で解説した後に、万葉仮名の和訓を併記した例が多く見られます。本草和名には山田孝雄博士の「本草和名訓纂」（五十音引索引）があります（本文（寛政八年刊本）と共に、日本古典全集で複製、医心方も安政元年刊の完本を日本古典全集で複製、古写本では仁和寺本及成簣堂文庫本の複製あり）。

平安中期から院政時代にかけて作られた「音義」の類の数は相当に上ります。それらの中には仲算の「法華経釈文」のやうに、註釈を全部漢字だけで書いたものもありますが、仮名で和訓を書添へたのも相当にあります。その仮名も、今までのやうに万葉仮名ばかりでなく、他に草仮名のものなどが作り始められます。宇多天皇（八六七―九三一）自筆の「周易抄」は音義よりも寧ろ訓註に近いもので、周易（易経）の中から字句を抽出し、所々に万葉仮名・草仮名で和訓を註したものであります（習字本大成・書道全集に複製あり）。この他、藤原公任の「大般若経字抄」（長寛二年（一一六四）写）③、法華経の中の文字を集めた「法華経単字」（保延二年（一一三六）写、重要美術品、国書影本刊行会複製、高羽五郎氏の漢字仮名索引あり）、承暦三年（一〇七九）に写した「金光明最勝王経音義」などがあります。最後の書では、仮名が万葉仮名で、しかも清音濁音を書分け、その上アクセン

トを示す声点さへ多く附せられてゐます。又少し時代は下りますが「倶舎論音義抄」（仮称、金澤文庫蔵、貞應二年一二二三寫）といふ書も伝はつてゐます。これらは何れも本文の順に漢字を並べたものですが、更にそれを辞書の体裁に倣つて並べ変へたものがあります。「法華経音」（仮称、平安末期寫、古典保存会複製）、高野山正智院・金沢文庫・東大国語研究室・久原文庫等に蔵する夫々異種の「法華経音義」など何れもこの類であつて、何れも片仮名で字音を示しただけのものであります。又、心空が応安三年（一三七〇）に完成した「法華経音義」もこれと同類の書ですが、これは同人の至徳三年（一三八六）刊「法華経音訓」と共に日本古典全集で複製されてゐるので容易に見られます（「音訓」は貴重圖書影本刊行会でも複製）。音義の類は外にも多数ありますが、信瑞「浄土三部経音義集」（嘉禎二年一二三六）を挙げるに止めて置きます。

「音義」の一種に数ふべきものになほ「日本書紀私記」があります。平安初期の書紀の講筵の時に作られたもので、その訓読の用語を万葉仮名で記したものですが、他の一般の訓読用語とは異つた点があります。古写本四種が「新訂増補国史大系」に収められ、又その中の一本たる応永本は古典保存会からも出てゐます。

以上述べた音義類は殆どすべて特定の書物（主に仏教書）について、その字句の音と訓とを述べたもので、その書物の講読或いは読誦の際に参照されたものと考へられます。たゞこれらには纏まつた索引の類も未だ殆ど刊行されて居ない為に、国語研究資料として用ゐるには十分に便利ではありません。又その中の語彙の種類も多くは訓読の用語で、次に述べる類聚名義抄の語彙の範囲を超えることは殆ど無いやうであります。

「類聚名義抄」（略称「名義抄」）は古辞書の中で最も重要なものの一つであります。と言ふのは、この辞書はその時までに伝はつた主な音義辞書及び訓点の語彙の集大成とも見るべきものだからであります。玉篇に倣つて百二十の部首に分け、漢字を字形によつて分類し、各字の下に仮名で音訓を註してあります。原形は久しく不明でありましたが、近年宮内庁書陵部で平安末期の古写本（零本、同庁で複製）が発見された為に次のやうな色々な事情が判明しました。即ち材料は広く和漢の辞書や音義や訓点本の傍訓などから集められたもので、成立年代は十二世紀の頃、編者は法相宗関係の僧侶と想像されます。編輯方針は引用原本に相当忠実であるらしく、漢文の註記もそのまゝ転載し、引用原本の名を多く記してあり、その中には逸書が非常に多数あります。原本で万葉仮名のものは（和名抄など）もとの通り万葉仮名で、又、もと片仮名だつたもの（訓点本の傍訓など）はそのまゝ片仮名で、書いてある為に、この本の和訓は万葉仮名と片仮名とが混在した珍しい表記法となつて居ります。

この書は編纂後間もなく大増訂が行はれ、引用原典の名称や漢文の註記は殆ど省略し、又従来は漢字一字のみならず二字以上の熟語が多かつたのを多く削り、新たに漢字を補ひ、又万葉仮名を直して片仮名に統一して面目を一新しました。この新形式の類には写本が数種知られてをり、その中で東寺観智院蔵本は首尾完備した鎌倉中期の写本で、写真複製（貴重圖書複製会）及び凸版複製（日本

古典全集があり、日本古典全集中には更に康熙字典順の漢字索引（前半のみ）と仮名索引とがあつて、語の検出に便利漢字やでありま す。古写本の一つたる高山寺本も、伴信友の影写本が複製され、仮名索引を附せられたものが京大の「国語国文」の別冊として刊行されてゐます。

類聚名義抄の材料は上述のやうに多くは漢文訓読関係の文献ですが、当時の訓読の用語は日常会話語と比べると少しばかり隔りがあつたもので、例へば日常会話語でよく用ゐる「いみじ」「おどろおどろし」などの語は訓読には用ゐられず、従つて名義抄には見えぬものであつて、この種の語は他にも相当にあります。

名義抄は語彙資料・辞書史資料として比類ない重要性を有するばかりでなく、国語音韻史上でも亦必要な文献であります。就中仮名に附せられた声点は当時のアクセントを示すもので、この符号は他の文献にも少くはないけれども、体系的に調査し得る点では、この書の右に出る資料は無いのであります。

類聚名義抄と並んで重要な書物は、同じく平安末期に作られた「色葉字類抄（いろはじるいせう）」であります。従来の辞書が漢字の形や音や意味などを基にして分類して居たのに対して、この書は、国語を基にして分類してゐることが大きな特徴であります。即ち、国語の最初の仮名に従つて全体をイロハの四十七部に分け、次にその各部を天象・地儀・植物等に分類して、該当する国語を、「雷ィカヅチ」「古イニシヘ」の如く、漢字と共に示したものであります（但し一部には字音語も含みます）。今まで辞書は、大抵漢文を読むために作られたのでありますが、この辞書は逆に、漢字で国語の文章を書く時に、どのやうな漢字を用ゐるかを知らうとする時、国語の発音から、それに当る漢字を見出す為、に編纂されたものと考へられます。かやうな種類の辞書の中では本書が最古のものの一つであつて、体裁の上からも、又所収の語彙の上からも、後代の節用集などに与へた影響は相当大きいと考へられます。

色葉字類抄には伝本に異同が多く、(イ)二巻本、(ロ)三巻本、(ハ)十巻本に大別されますが、(ロ)は(イ)の整理本で、天養治承の頃（一一四四―八一）に橘忠兼（たちばなのただかね）が編輯したもの、(ハ)は鎌倉時代の増補であります。複製本には、(ロ)の類に前田本（尊経閣叢刊）、黒川本（古典保存会）があります。前田本は鎌倉時代初期の貴重な写本ですが惜しいことに上下の二巻だけで中巻の全部と下巻の一部とが欠けてゐます。黒川本は江戸時代の写しですが、前田本とは同系統であり、上中下三巻が完備してゐるので前田本に無い部分が補へます。複製本には山田孝雄博士の「色葉字類抄攷略」が添へられて居り、委曲を尽した解説があります。又十巻本の流布本には正宗敦夫氏の謄写版複製、及びそれを縮写した日本古典全集本があります（十巻本は「伊呂波字類抄」と書きます）。

色葉字類抄の単語は名義抄よりも範囲が広く、名義抄では、大体漢字一字で、漢文訓読語彙に限られてゐたのに対し、これには固有名詞、二字以上の熟語、及び漢文訓読以外の日常語なども相当にあるので、漢字を含む国語国文の研究、殊に院政期の説話文学等の研究には有益な場合が多いのであります。

一世俗字類抄（せぞくじるいせう）」「節用文字（せつようもんじ）」は共に色葉字類抄と同じ系統の書で又同じ体裁であり、

節用文字の祖本―→節用文字↓世俗字類抄↓色葉字類抄

のやうな関係と考へられて居ます④。世俗字類抄は写本だけで複製本はありません。節用文字は鎌倉時代の写本（成簣堂文庫蔵、零本）が古典保存会で複製されてゐます。

㈢ 鎌倉室町時代

鎌倉時代の作と考へられる辞書に「字鏡」「字鏡集」があります。「字鏡」は「世尊寺字鏡」とも云はれ、東洋文庫に鎌倉時代の写本二冊があります（貴重図書影本刊行会で複製）。漢字を字形（劃）で分類排列したもので、新撰字鏡や類聚名義抄と同類でありますが、漢字は殆ど一字だけで、その下に片仮名（万葉仮名も少々あり）で字音や和訓を記してあります。零本ですが訓が著しく豊富で、語彙史・音韻史上有益と考へられます。「字鏡集」もこれと同類の書で、菅原為長の編と伝へられ、漢字を偏傍によつて分け、更に偏傍を天象・地儀等に分つてあります。写本に寛元本、応永本、白川本などがありますが、複製本は未刊です。たゞ野口恒重氏がこの三本を校合した凸版刷の本（和訓索引添付）がありますが、編纂者が手を加へてあるので、国語資料とするには少々危険なことがあるやうです。

鎌倉時代初期に出来た「名語記」は建治元年（一二七五）に完成し、稲荷法橋経尊の著で、自筆本が現存してゐます。第一音節と第二音節とをいろは順に並べたもので、語源解釈が多く、又文法学史の点からも注意されるものであります（複製飜刻なし）。

同じく鎌倉時代の成立と考へられる「平他字類抄」は、上巻では、先づ天象・地儀等の十三部に分ち、それを平声と他声（上声去声入声）とに分けて、その項目毎に語をいろは順に並べてあり、又下巻では、漢字を訓によつていろは四十七字に分つて並べたもので、色葉字類抄と深い関係があります。国語からその漢字の平仄を知る為の辞書で、漢詩を作る時の参考に用ゐられたものと考へられます（続群書類従に所収）。室町時代文明年間（一四六九―八七）頃の作られたかと言はれる「新韻集」も同じ役に立つ書で、平他字類抄の下巻と同体裁、著者は万里集九で、その自筆本かと思はれる阿波国文庫蔵本が日本古典全集から刊行されてゐます。

話し言葉と書き言葉との隔りが少く、又、古語に関心を払ふことが少かつた時代は平安中期で終結して、平安末期から以後は言文二途に別れ、古語尊重の意識が強くなつて来たので、歌学の方で、歌語や古語を解説した辞書が現はれます。上覚の「和歌色葉集」（建久七年一一九六成といふ）や順徳院の「八雲御抄」は歌学一般を述べた著書ですが、その中に語彙を意味によつて分類して語義を解いた部分があります。いろは順に並べたものに、長慶院の「仙源抄」笠源の「類字源語抄」（元享二年一三二二）のやうな源氏物語の註釈書、及び「藻塩草」「匠材集」「無言抄」などがあります。

これらの書物は、当時の学者たちが、どのやうに解釈をしてゐたかといふ問題の研究に役立つものであつて、今日の語釈には必ずしも直接に役立つとは限らないわけであります。

室町時代は通俗の辞書が多く作られた時代で、この時代の辞書

を、㈠国語の音で引くもの、㈡漢字の韻で引くもの、㈢漢字の字形で引くもの、㈣分類体のもの、に分けることが出来ます。

第一に、国語の音で引くものは「節用集」の⑤類があります。この原著者は未詳ですが、禅宗の僧と思はれ、室町時代の中頃に作られたやうで、その後、多くの人々によって増訂され、その結果今日に見られるやうな種々の異本が出来上つたもののやうであります。漢字を用ゐて文を綴る時に、国語の発音から漢字を求める目的で作られたものと思はれます。先づ全体を、語の最初の仮名に従つて「いろは」に分ち、更に各項を天地、時候等の門を分けて、それ〳〵の所属の語を漢字で列挙しそれに片仮名の振仮名を附したもので「色葉字類抄」と同体裁であります。異本が非常に多いのですが、巻頭の語彙によつて内容の性質までも区分し得るので、その巻頭の語を取つて、㈠印度本、㈡伊勢本、㈢乾本の三種に分けられてゐます。複製本として刊行されたもの数種だけに触れて置きますと、㈠印度本では前田家蔵の黒本本（尊経閣叢刊）、㈡伊勢本では帝国図書館蔵の伊京集（同館複製）、岩崎文庫蔵天正十八年本（天正十八年より少し後年の刊、貴重図書影本刊行会）饅頭屋本（古刊本珍書保存会複製）、㈢乾本では易林本（慶長二年刊、日本古典全集）があります。又これらと別に「温故知新書」なる書が尊経閣叢刊で複製されてゐますが、これは体裁は節用集式ですがいろは順でなく五十音順になつてゐます。又「運歩色葉集」は、最初の仮名によつていろは四十四部に分けた点は節用集と同じですが、それ以上分類体を用ゐてゐないのが特色です。天正十六―七年（一五八八―八九）の成立で、謄写版飜刻に刈谷文庫本、京都大学本があります。

漢字の韻から引くものには「聚分韻略」があります。虎関師練の著で、漢詩を作る便宜の為に、漢字を平上去入の韻で分け、同韻の字を更に乾坤、時候、気形以下十二門に分けてその下に註や和訓を附したものであります。作詩の際にもてはやされて屢々版を重ねたものであります。

漢字の字形から引くものには「和玉篇」があります。多くの異本の中で慶長年間（一五九六―一六一五）の古活字版の刊本が日本古典全集で複製されてゐます。全体を二百余の部首に分ち、その音と和訓とを片仮名で記してあります。

最後に、分類体のものは「下学集」であつて、文安元年（一四四四）に東麓破納なる人が著したもので、天地門時節門等の十八門に分け、各門に漢字を項出し漢文で註を附し、そのよみ方を片仮名で示したものであります。元和三年（一六一七）の版が亀井孝氏の校定によつて岩波文庫に活字化され、又最近その索引（森田武氏編）が国語学資料の中に収めて刊行されました。

これと類似の分類体辞書に「頓要集」（周防国に住んだ僧侶の撰か、南北朝室町初頃撰、古典保存會複製）「撮壌集」（飯尾永祥撰、享徳（一四五二―五五）の頃成）及び「類集文字抄」（室町期成）この二書共續群書類從所收）があります。

室町時代から江戸時代にかけては、右のやうな諸種の辞書が広く行はれましたが、これらは何れも日本人の手で編纂又は刊行されたものであります。これに対して「キリシタン物」と呼ばれる一類があつて、当時布教の為に渡来したカトリック宣教師たちが編纂刊行した書物があります。これについては本誌第十一輯の入門講座の池上先生の懇切な御解説に譲りますが、辞書関係のものだけ二三申し述べます。この中、「日葡辞書」（Vocabulario da lingoa da Iapam com adeclaração em Portugues）は一六〇三年長崎刊行で、後にLéon Pagès がそのポルトガル語の部分をフランス語に飜訳し、若干の補訂を加へて「日仏辞書」（Dictionnaire Japonais-Français）としてパリで刊行したものがあります。日仏辞書は最近土井忠生博士の解説を附して一誠堂書店で複

製しましたが、研究上誠に便益の大きいものであります。又、一五九五年天草学林刊行の「羅葡日辞典」を、一八七〇年にローマで「羅日辞典」として刊行したものがあります（羅日辞典は昭和二十四年に複製）。これらは何れも外国人宣教師たちの日本語習得の為に作られたものです。

同じキリシタン物の辞書の中でも「落葉集」は日本人の為のものであります。一九五八年にイエズス会から発行されたもので、「本編」「色葉字集」「百官国尽」「小玉編」の四篇から成り、「本編」は字音から字形と字訓を求める為のもの、「色葉字集」は字訓から字形と字音とを引くに供するもの、「小玉篇」は字形から字音と字訓とを引くに用ゐられるもので、全体として統合的になつてゐる辞書として注目すべきであります。最近、高羽五郎氏の「国語学資料」に収めて刊行されてゐます。

室町時代の辞書の語彙がどのやうな性格のものであるかに就いては、未だ殆ど解明されて居りませんが、当時としての現代語ばかりでなく、「古語」と見做されてゐたものも相当含まれてゐるだらうと考へられます。

これらの辞書を見渡して考へると、当時の語彙の全貌が知り得るばかりでなく、又、下学集等の漢文の註記や、仮名と漢字との関係や、日葡仏辞書のポルトガル語（フランス語）の訳を見るとその語彙の意味を知ることが出来、又、仮名やローマ字の綴り方からは当時の発音を知るよすがが得られます。室町時代の辞書は分量も多く、方面も多種多様である為に、語彙の数が多く、当時の文献を解読するのに役立つばかりでなく、江戸時代語の研究、さては遡つて中世語中古語古代語の研究にも重要な手助けをするものであつて、今後益々活用されることが期待されます。就中、漢語や固有名詞の読み方については、鎌倉時代以前の資料は極めて僅なので、この点「落葉集」などは殊に価値高い資料と考へ得るやうであります。

江戸時代及びそれ以後の辞書については、色々性格も違ひますから、今回は省略することにします。

古辞書類の研究は今日まで主に書誌の研究に止まつてをり、古辞書類が国語史研究に活用されるのは主に今後の問題であります。その基礎作業として、先づ第一に、原本の複製、索引の作成が強く要望されることを申し添へて、この稿を結びます。

註

①中田祝夫先生御教示。

②川瀬一馬氏「現存『日本感霊録』に就いて」（日本書誌学之研究所収）参照。

③渡辺修氏「類聚名義抄の呉音の性格」（国語学会研究発表会、昭和二十七年十月）

④宇野つる子氏「節用文字の位置」（国語と国文学二十六ノ七）

⑤節用集の書誌学的研究については、橋本進吉博士（上田万年博士と共著）「古本節用集の研究」及び山田忠雄氏「橋本博士以後の節用集研究」（国語学第五輯）に詳しい。

○なほ古辞書全般については、右の「古本節用集の研究」の中に適切な概説があり、又、山田孝雄博士「国語学史」には体系的に整備された詳論が見られ、又、岡田希雄氏もこの方面に関し多くの有益な論考を発表して居られます（岡田希雄氏発表文目録、国語・国文十三ノ四）。更に又「増補改訂日文本学大辞典」（新潮社）の記事（亀田次郎氏、山田忠雄氏、山田俊雄氏等執筆）も精細でありますから、有志の方はこれらの文献を参照されることを望みます。

——中央大学助教授——